

肢体不自由と視覚障害を有する方を対象とした長袖前開きボタン付きシャツの着衣動作の軽減を図る衣服の改良

Improvement of a long sleeves shirt fastening in front button for people with physical disabilities

○石崎 唯¹, 渡辺修宏²

Ishizaki Yui¹ & Watanabe Nobuhiro²

水戸看護福祉専門学校介護福祉学科¹, 水戸看護福祉専門学校²

Mito Nursing & Welfare College Care Worker course¹, Mito Nursing & Welfare College²

Key words: Toggle-button, physical disabilities, dressing time, dressing activity

目的

身体になんらかの障害を有すると、日常生活動作に支障をきたす場合がある。例えば、衣服の着衣においては、着衣時間が長くなったり、着衣動作が煩雑化するなどの労力の増大が考えられる。その場合、障害を有する者は様々なリハビリテーションを受けることによりその労力の軽減を図ることとなる。しかし、衣服の改良によって着衣動作の軽減を図ることができれば、そのような労力は軽減されると考えられるだろう。

本研究は、障害を有する方の着衣にはどのような課題があるかを明らかにし、そして、その課題を解決するための衣服の改良を行う。そして、衣類改良が着衣にもたらす効果について検討する。

方法

参加者 本研究の参加者は、障害者支援施設に入所利用する障害者3名(男性1名, 女性2名)と、身体障害者に対する着脱介助の経験がある学生4名(19-20歳の男女2名ずつ: M1, M2, F1, F2)であった。

期間 20XX年6月~10月の約4か月であった。

場面 障害者4名に対しては、彼らの居室でインタビューを行い、彼らが普段から利用しているベッドで着衣実践を撮影した。彼らにベッド側面に端座位をとらせ、彼らの正面から2m離れた位置にカメラを設置して定点撮影した。学生4名に対しては、介護福祉士養成機関の介護実習室にあるベッドの側面に端座位をとらせ、着衣実践を行った。それ以外の手続きは先と同様であった。

手続き

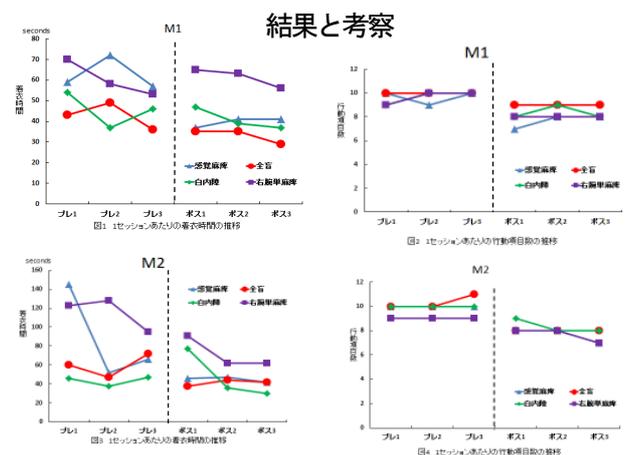
身体に何らかの障害を有する方の着衣時における課題を明らかにするために、障害者支援施設1箇所にて、片麻痺などの肢体不自由がある利用者4名に対し、自立着衣時における不便さなどについてのインタビューを行った。また、彼らの、長袖前開きボタン付きシャツの着衣実践を撮影した。その結果、「患側の腕を袖に通す際に手間がかかる」「ボタンを留める際に時間がかかる」「大きめのサイズでないとスムーズに着衣ができない」といった課題が明らかとなった。

障害者支援施設でのインタビューと着衣実践からわか

った課題をもとに、学生4名に対し、右腕単麻痺、白内障、全盲、両手感覚麻痺の4種類の動作制限を再現させ、既製服の長袖前開きボタン付きシャツの着衣実践をそれぞれ3回ずつ行った。なお、着衣の反復による学習効果を除去するため、動作制限の実施順番は参加者ごとに異なった。その結果、それぞれの動作制限において「ボタンをとめる際に手間取る」ということがわかった。

これらの課題をもとに、既製服のボタンをトグルボタンに変え、ボタンの数を5つから4つに減らした。さらに、ボタンを留めた後にトグルを固定するポケットを装着した。その後、学生4名に対して、先の述べた4つの動作制限に基づく着衣実践を再度行いし、着衣時間と着衣行動項目に対する衣服改良の効果を検討した。

倫理的配慮 参加者に研究の目的と方法を説明し、同意を得た。また、参加者は一人ずつに撮影を行い、参加者間で着衣動作を見ることがないように配慮を行った。



着衣時間は、改良前は平均64.7秒(SD=29.36)であったが、トグルボタンなどの改良後は平均47.5秒(SD=15.37)に減少した。また、着衣動作項目数は、改良前は平均9.8つ(SD=0.5)であったが、改良後は平均8.1つ(SD=0.58)に減少した。したがって、トグルボタンなどの改良は、着衣時間と着衣動作項目を減少させる効果があることがわかった。ただし、動作制限の種類によって、その効果にばらつきがみられた。